岡山県立
博物館だより
Okayama prefectural museum
2002,03,31
57号

平成13年度を振り返って

館長　松井新一

平成13年度の終わりに当たり、博物館の1年間の事業を振り返って、若干の感想を付言します。

まず、展覧会は例年のように、春夏秋冬の季節ごとの常設展、特別展、企画展で構成し、それに特別陳列を加えて開催しました。

最初の特別展は、10月末から1カ月間にわたり、「おかやま教育の日」の協賛事業として、「命を与ふー医療の歴史ー」を開催しました。日本の医学史を繙きながら、医療従事者の事績や治療の歴史を、県内初公開の国宝「病草紙」「医心方」など、470点余の資料により紹介し、郷土の誇る先人の果たした役割の重要さを認識し、医療先進県・岡山の原点を見つめ直す展覧会としました。また、年度末に開催した2回目の特別展は、古代吉備を特徴づける考古資料の特殊器台にスポットを当て、「王墓を彩る－特殊器台の系譜－」と題して、器台から埴輪までの変遷をたどる約180点の資料の展示を通し、吉備と大和政権とのかかわりなど、郷土「吉備とは何か」を考える展覧会としました。いずれも多数の鑑賞者と専門家の賞賛をいただき、感謝しているところであります。

企画展は、これまでに本館に寄贈された考古、美術、工芸、文書などの資料を、「ありがとう　受贈資料品展」として展示しました。寄贈資料は200件近くにのぼり、開館30年が過ぎ21世紀を迎えた今年度、多くの方々の善意により未来へ託されたこれらの資料をまとめて展示し、感謝の気持ちを表すとともに、これらを次世代へ永く伝えていくことの、大切さ、素晴らしさを再認識する展覧会にしました。貴重な資料をご寄贈くださいました方々に、あらためて心からお礼を申し上げます。なお、民俗資料については、展示スペースの制約から、来年度夏に展示します。ご期待ください。

特別陳列「和船模型住吉丸受贈記念展」は、慶応年間に造られた弁才船住吉丸を元船大工の方が、1年をかけて、残された板図から10分の1に復元した模型を寄贈されたのを記念して、当時の船にまつわる資料とともに展示したものであります。

常設展では、「中世の豪族・赤松氏」「ロマンティクガラス展」「地理学者古川古松軒」「金山寺の千手観音像」等の展示がマスコミにも紹介されるなど、好評のうちに終了しました。

その他の事業として、毎年好評の博物館講座は、定員60名に対し100名近い応募がありました。来年度は、日数や受講者数など規模の拡大も踏まえて、充実したいと考えています。また、夏休みに小中学生の親子を対象に実施した博物館探検も40名ほどの親子が参加し、終日楽しく博物館で過しました。

以上が今年度の主要事業の概要であります。

近年、博物館を取り巻く環境が大きく変わり、博物館自身の改革が必要とされています。昨年4月国立博物館3館は、1つの独立行政法人国立博物館となり、地方においても、法人化や法人への管理運営委託の波は、徐々にではありますが、着実に広がりつつあります。また、全国的に入館者の減少が続いており、廃館や活動を停止する博物館もあります。

本館の入館者数も、平成12年度にはじめて4万人を割り、今年度はさらに減少する見込みです。開館以来30年が経過し、施設面は別としても、IT化や展示技法の進歩などに、適切に対処しているとは言いがたい状況もあり、入館者減少の要因ともなっていると考えられます。

今年度から、1万4千件の館蔵資料のデジタル化に着手もしました。また、来年度4月から小中学生は、常設展を無料化し、完全学校週5日制や総合的な学習の時間への対応など、学校との連携強化を図りたいと考えています。

皆様に親しまれ、時代の要請に応えられる博物館として発展するよう館員一同いっそうの努力をしてまいる所存でありますので、今後とも、関係各位のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

県博の思い出

副館長　竹林栄一

昭和50年教職を離れて以来、途中3年間の図書館勤務があったものの、岡山県立博物館での勤務は24年に及んだ。その間、いろいろな方々との出会い、様々な資料との出会いがあった。私のかけがえのない財産である。特に毎年の特別展では、数多の所蔵者の皆様にお世話になり、貴重な資料を借用して公開させていただいた。

故林屋辰三郎先生にお願いして初公開させていただいた「兵庫北関入船納帳」、亡くなったおばあちゃんの遺言ではじめは家から出すことは出来ないと言われながら出陳していただいた「清水屋客船帳」、無理だろうと思いながらお願いしたところ、気持ちよく公開を許してくださった厳島神社の「平家納経」などなど、数え上げればきりがない。

岡山県立博物館は、開館以来実物資料による展示を心がけ、特別展は県立の歴史博物館として実施すべきテーマを学芸員が討議して企画し開催してきた。予算期には翌年度のテーマについて長時間議論するのが常で、その過程で今さらながら原点に立ち返って考えることの重要さを知った。私の中に何となく存在する地獄、この日本人の意識は何時、どのようにして生まれたのか、このテーマは特別展「恐怖と救済ー中世人の生と死ー」として結実した。「水と暮らし」は水の大切さを痛感した翌年の企画であった。人々の今日的関心、私自身が抱える関心事はそのまま展覧会のテーマになった。

学芸員としてこだわりを持つことの大切さも学んだ。撮影を依頼された経塚出土の朱書経は文字が消えていたが、斜光をあてると筆跡が見えた。どのように撮影するか、数日間考え抜いた結果思いついたのは、斜光を当てハレーションした文字をアオリ機能を使って撮影することであった。特別展「古地図」では、折りたたまれて伝来した地図類をどのように展示するかで悩んだが、小穴をあけた帯状のアクリル板で止めることに思い至った。

貧しい家の子は育つという。思考すること、こだわりを持つことの大切さを痛感する日々であった。

定年退職を目前にすると、さまざまな思い出が目の前をよぎる。概して幸せな博物館勤務であったことを感謝している。

弁才船住吉丸について

学芸員　木下　浩

住吉丸は小廻し弁才船とよばれる船で、笠岡市立郷土館に残された板図（設計図）をもとに、倉敷市玉島の船大工加瀬野工氏が10分の1の大きさで和船模型として復元したものです。加瀬野氏は代々船大工の家に生まれ、御自身も船大工として、船の製造に長くたずさわってこられました。現在は船の需要がなくなったため、和船の姿を後世に伝えようと模型作りに取り組まれています。今回の住吉丸も約1年をかけて製作し、岡山県立博物館に寄贈されました。

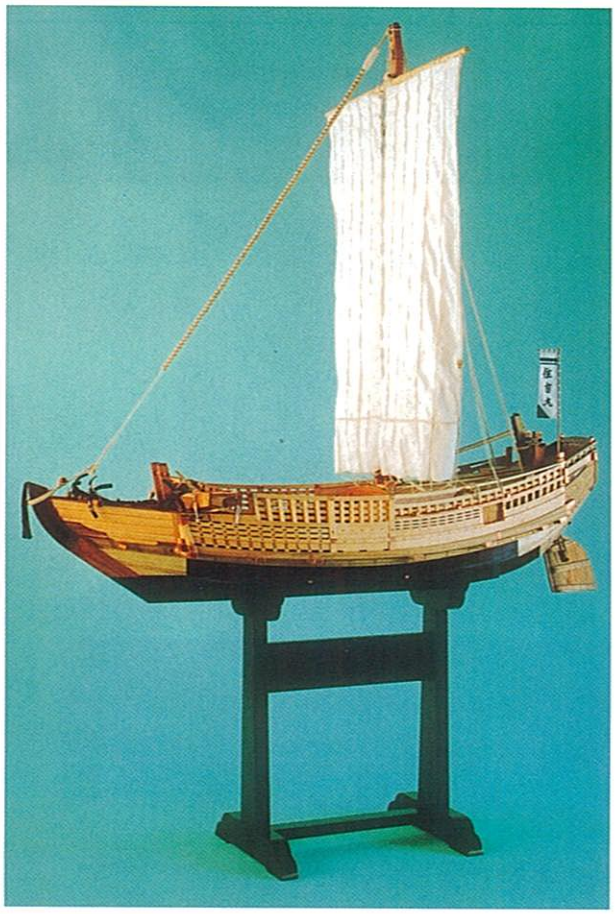
住吉丸製作中の加瀬野工氏

弁才船とは

江戸時代、江戸・大坂の二大市場と地方都市での消費の増大は、商品流通を急激に発達させました。特に、一度に大量の物資を運べる海上輸送の網は日本全国に広がっていき、弁才船もその中に登場しました。

もともと瀬戸内を中心とした中・小型の船型の弁才船は、その帆船性能や経済性、使いやすさなどから他の船型を次第に圧倒します。やがて18世紀には大型化も実現して、全国的に普及していきます。私たちがよく知っている千石船とは千石積める弁才船のことで、いわゆる東廻り航路や西廻り航路といった日本海から太平洋を航海した弁才船（千石船）だけでなく、瀬戸内海を中心に物資輸送に活躍したのが小型の弁才船（小廻し弁才船）なのです。

住吉丸は備中国生江浜村（現在の笠岡市生江浜）の商家で船主の浅野家が所有した弁才船です。慶応元年



和船模型住吉丸

（1865）、牛窓の船大工九左衛門に積載量150石（約25トン）で発注されました。全長約17メートル、住吉丸の設計図が描かれた「板図」と呼ばれる板が残されており、そこに閏5月18日に造船が始まり、9月2日に船卸を行ったと記録されています。約3カ月かけて製造された住吉丸は、その後の記録が残されていないものの、船の耐用年数から考えると明治時代の終わりごろまでは使用されたと思われます。浅野家が所有する船は代々住吉丸と名付けられており、この慶応元年に造られた住吉丸も何代目かの住吉丸ということになります。また、浅野家はほかにも何隻かの弁才船を所有しており、「金比羅丸」「住勢丸」などの名前が記録に残されています。

岡山商科大学所蔵浅野家文書に残された記録から住吉丸について見てみましょう。

住吉丸の航海

住吉丸は笠岡・下津井の港と、大坂・堺・神戸の関西の港を結んで商売を行っていました。例えば先代の住吉丸の記録ですが、安政4年（1857）の航海を見てみましょう。

7月3日	早朝	大坂安治川出航
4日	午後2時	小豆島大角鼻沖
5日	夜明け	下津井六口島
	正午頃	笠岡入港
7月27日	正午頃	笠岡港出航
	午後9時	正頭沖
28日	夜明け	下津井沖
29日		大東風で滞船
8月1日	早朝	与島出帆
	夕方	兵庫港入港
4日	正午頃	兵庫港出航
	夜	天保山入港

このように月に1往復か1往復半、早ければ2泊3日ぐらいで笠岡と関西を結んでいたことが分かります。

航路としては、小豆島の南を抜け、讃岐の志度・引田沖から淡路島西岸を通るルートもあったようですが、小豆島の南から直接明石海峡に向かうルートや牛窓・赤穂を結んで海岸線沿いに進むルートが多かったようです。

また、東方面には和歌山まで行った記録が見られますが、西方面には笠岡より西の記録は見られません。つまり住吉丸は主に東瀬戸内海を活躍の場としていたことが分かります。

積載物

浅野家は中継ぎ問屋として、実に多くの物資を運搬しています。

木綿や刀身などの備前・備中の名産や御用米、みかん・大豆・小豆・醤油・砥石といった物資を運んでいました。記録には能代大豆や越後大豆、秋田大豆、肥前米や加賀米といった名前がよく登場します。

また、手紙や乗客も運んでいて、時には17人もの乗客を大坂から運んだ記録が残されています。

このように江戸時代から明治時代にかけて、瀬戸内海の主役であった小廻し弁才船も今は全く姿を消し、模型でしか見ることができなくなったことは非常に残念です。

※参考文献　『日記覚』『大坂覚仮控』（ともに岡山商科大学所蔵浅野家文書）

来年度事業のお知らせ

特別展 ● あめ・つち・ひと ―遺物が語る自然とのかかわり―

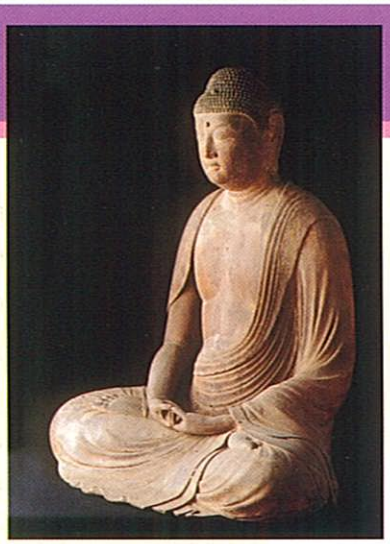
平成14年10月25日㈮～11月24日㈰

日本人は、恵まれた自然環境の中で、自然と密接なかかわりをもつ文化を築いてきました。自然とともに生き、自然に働きかけ、自然と戦ってきた先人の足跡をたどります。

古代の護岸施設　岡山市津寺遺跡
写真提供　岡山県古代吉備文化財センター

特別展 ● 備前四十八ケ寺 ―近世備前の霊場と報恩大師信仰―

平成15年1月31日㈮～3月2日㈰



備前四十八ケ寺は、奈良時代の報恩大師による開基・中興の伝承を持つ寺々の結集です。４８の寺院の宝物や資料、周辺の諸資料を通して、報恩大師信仰と備前四十八ケ寺の歴史に迫ります。

岡山県指定重要文化財
阿弥陀如来坐像　金山寺蔵

企画展 ● もう一つの備前焼の表情（青備前）

平成14年4月25日㈭～5月26日㈰

企画展 ● ありがとう　受贈資料品展Ⅱ ―人々の生活と道具―

平成14年7月20日㈯～9月1日㈰

博物館講座
実施　平成14年6月
募集　4月～5月

博物館探検
実施　平成14年8月
募集　7月

岡山県立博物館だより　第57号
● 発行日／平成14年３月31日
● 発行者／岡山県立博物館　館長　松井新一
● 連絡先／〒703-8257　岡山市後楽園１-５　☎086-272-1149
● ホームページアドレス／http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kenhaku/hakubu.htm